

令和7年度鶴見大学学長裁量経費採択記念

講演会 令和8年2月28日 土

〔入場無料〕

〔会場〕鶴見大学図書館地下1階ホール 〔開演〕11時（10時30分開場）

◆天海版『金七十論』解説…万波寿子（ドキュメンテーション学科講師）

興津香織氏

日本大学文理学部准教授

著書『インド二元論哲学へのいざない』（菅元啓一氏との共著・花伝社 2008）

『金七十論』

—江戸時代のインド哲学研究—

第165回鶴見大学図書館貴重書展示

貴重書展 令和8年2月21日 土 ～ 3月7日 土

〔会場〕鶴見大学図書館1階エントランスホール

●開館時間は図書館ホームページをご覧ください。

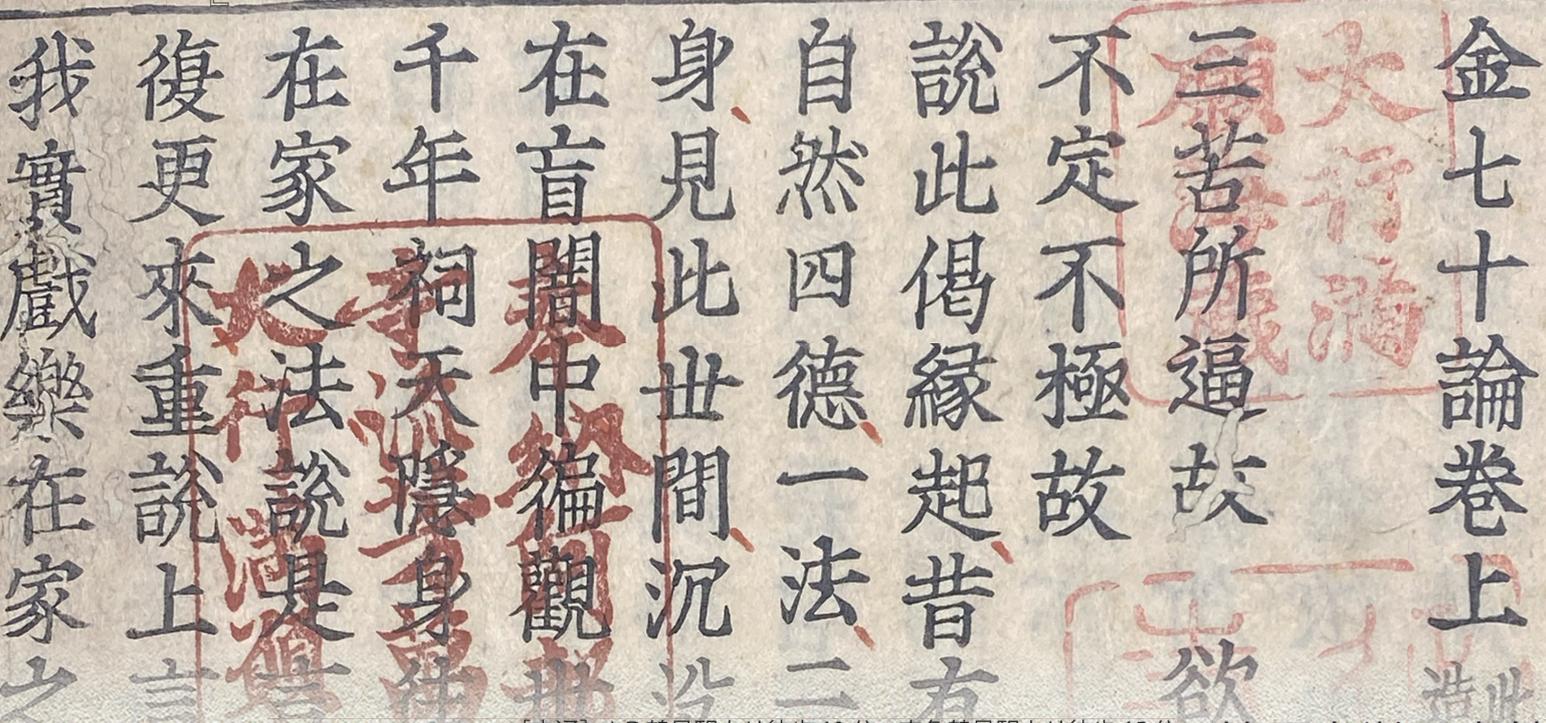
『金七十論』と『勝宗十句義論』

◎主な展示品 寛永一四年刊天海版『金七十論』／元禄一〇年刊『金七十論』／明和六年刊 晁應撰『金七十論備考』

天海版『添品妙法蓮華経』／宝暦一〇年刊 虎喝撰『科註勝宗十句義論』／安永八年刊 基辨撰『勝宗十句義論釈』

寛政八年刊 快道撰『勝宗十句義論訣釈』／天保一五年刊 法雲講・稻溪・密雲記『十句義論問記』

●『金七十論』とは、サンキヤ学派（古代インド哲学大学派の）の根本教典『サンキヤ・カリーカ』の注釈書を、訳経僧眞諦（499～552）が漢訳したもの。ヨーカ学派の実践哲学に対して、理論哲学のありようを示す。大蔵経中に収録されるインド哲学に関する文献としては、『金七十論』とヴァイシーニシカ学派の『勝宗十句義論』があるのみ。日本では、江戸時代後期に学僧による複数の注釈書が刊行されている。



〔交通〕JR鶴見駅より徒歩10分・京急鶴見駅より徒歩15分

<https://www.tsurumi-u.ac.jp/site/library-official/> https://twitter.com/tsurumiuniv_lib

鶴見大学図書館

第165回 鶴見大学図書館貴重書展

『金七十論』と『勝宗十句義論』

I 『金七十論』

『金七十論』とは、古代インド哲学六学派の一つであるサーンキヤ学派（数論）の根本経典である『サーンキヤ・カーリカー（数論頌）』の注釈書（梵語原本は散佚）を、訳経僧である真諦（499-569）が6世紀に漢訳したもの。真諦よって漢訳された『金七十論』は、中国においてはあまり顧みられることがなかったが、本朝では江戸時代の後期に複数の学僧たちによって研究が進められ、注釈書が刊行された。

1 『金七十論』天海版 3巻1冊 寛永14年（1637）刊

袋綴装。飴色無文様表紙（28.3×21.4cm）。題簽なし、外題は左肩打付け書き「金七十論 全」。古活字版。蔵書印は朱印のものが「大行満願海」、「願慶寺印」、「奉納阿郡山寺流芳万年大行満願海」、「延暦寺印」。墨印のものは「上野養寿院蔵」、「宝鈴文庫」（下巻末のみ）

天海版大蔵経のうちのひとつ。だが、当該書は弊学図書館蔵天海版『添品妙法蓮華経』と同様、冊子体である。天海版は、思溪版蔵経、一部に普寧寺版蔵経・嘉興蔵など先行する中国の大蔵経を底本として作られた活版印刷物で、使用した活字は26万8044字。日本のメディア史に残る一大印刷物である。通常は折本装に仕立てられるが、当該本は袋綴装になっており稀少である。

刊記には「日本武州江戸東叡山／山門三院執行探題門毘沙門堂門跡／大僧正天海願主／寛永十四丁丑曆十二月十七日」とあり、天海の名が確認できると同時に、当該本が天海版が上野の寛永寺を拠点として印刷されはじめた最初期の本であることもわかる。

古代インド哲学のうちサーンキヤ学派の漢訳注釈書『金七十論』の本文であるが、他の天海版同様無訓本であり読みにくいものの、奉納用や儀式用に仕立てられる折本装ではなく実用的な袋綴装であるので、何らかの用途のために通常の天海版とは別に製作されたのかも知れない。天海版で袋綴装の『金七十論』は他にも早稲田大学図書館などに所蔵がある。

蔵書印は多いが、「上野養寿院蔵」と「大行満願海」があることから、もとは上野寛永寺の子院養寿院で出家した願海の所持であったようだ。願海は高崎出身の天台宗僧侶で、若くして養寿院から比叡山に移り、そこで荒行中の荒行と言われる千日回峰行を満じたことで知られる。また、「奉納阿郡山寺流芳万年大行満願海」との印から、願海は当該書を「阿郡山寺」（滋賀県の明王院）に寄贈したらしい。しかしその後散逸し、昭和初期に来日したイギリス人言語学者フランク・ホーレー（1906-1961）のコレクション宝鈴文庫に入ったと、「宝鈴文庫」の印から推測される。そしてさらに、同書は昭和47年（1972）に刊行された『弘文荘待賈録』第42号に掲載されている天海版『金七十論』と同一と見做せるので、その後古書市場に流れたようである。

2 『金七十論』3巻3冊 元禄10年（1697）刊

袋綴装。黄土色布目押文様表紙（25.1×17.3cm）。表紙左肩子持ち粹刷題簽「論 金七十論 上（中）（下） 疑」。五つ目綴じ。蔵書印「文花堂図書印」。

本書は古代インド哲学のうちサーンキヤ学派の漢訳注釈書『金七十論』の本文である。伝統的なバラモン経哲学書で、仏教経典ではないが、仏教側からの関心の高さから大蔵經に取められたと考えられる。

黄土色の表紙、外題角書きの「論」と下の「疑」という文字、版面の半丁10行1行20文字のレイアウトなど、天和元（1681）年に刊行された黄檗版大蔵經を意識した装訂であること明白である。黄檗版と大きく異なる点は、訓点（倭点）が付され、校異が書き込まれていること、また、刊記には京都の本屋村上平楽寺（現在の平楽寺書店）の名前があり、明らかに町版ということだろう。大きさも黄檗版大蔵經よりも小さいので、値段も紙代の分廉価であったと思われる。つまり、大蔵經よりもはるかに読みやすく、かつ入手もたやすい本と言える。

当該書には如海日妙（?～1711）の自跋があり、「外道」（サーンキヤ学派）は名高いが内容は知られていない、だから自ら「倭点」（訓点）を施し刊行すると述べられている。中国の孔子や老子よりも「外道」は勝れているとしており、一定の評価をしている。『金七十論』を読んだ如海が、これを広く流布させるために付訓し町版で刊行させたものと言えよう。如海は仙台の孝勝寺二十一世と伝えられるが、跋の末に「飯高妙雲山法輪講寺如海」とあるので、当時は日蓮宗飯高檀林の学僧であったと推測される。

なお、当該書は自跋のあとに本文末と音義、刊記が来ているが、諸本は刊記の後に自跋が来ることが多い。

参考：興津香織「江戸期における『金七十論』研究の背景」（『印度學佛教學研究』第六十四卷第二号 2016年）

3 暁應撰『金七十論備考』 明和6年（1769）刊

袋綴装。砂色無文様表紙（27.1×18.5cm）。表紙左肩子持ち枠淡色刷題簽「金七十論備考 上（中）（下）疑」。角切れあり。蔵書印なし。

当該書は古代インド哲学のひとつサーンキヤ学派と『金七十論』の概説を述べ、次に各偈文と長行部分の注釈を行っており、近世に集中して出版された『金七十論』注釈書の中でも初期のものに属し、かつ基礎的な書である。

著者は越前の真宗大谷派僧侶暁應（1724～1785）。本文と同筆の偈が最後に添えられており、これによれば『金七十論』を「魔界有縁の法なり」と非難し、「如来所説の真法」との正邪を分別して論じたことが述べられており、『金七十論』を警戒しているとわかる。

表紙の色こそ黄色ではないが、版面は半丁10行、1行20文字で、先行する元禄15年の『金七十論』や黄檗版大蔵經中の同書を受けての刊行であったと推測される。

当該書の末尾の偈頌には「此の論（『金七十論』）は魔界有縁の法なり」と述べられており、『金七十論』を警戒し、批判的に捉えていることがわかる。

版元は京都の大手で仏書も多く手がけた銭屋庄兵衛と、日蓮宗関連書の出版で有名な村上勘兵衛（村上平楽寺、現在の平楽寺書店）である。

参考：興津香織「江戸期における『金七十論』研究の背景」（『印度學佛教學研究』第六十四卷第二号 2016年）

参考『添品妙法蓮華經』天海版 8巻8冊 寛永15年（1638）刊

袋綴装。淡香色無文様表紙（28.7×21.0cm）。題簽無枠、右肩に打付け書きで「添品妙法蓮華經 一（二

～八)」。五つ目綴じ。蔵書「不許／超倫蔵／出門」、「无礙菴」（各表表紙右下および各冊の巻末にもあり）、「貞随」（墨印、各冊前見返し）、「感随」（墨印、各冊の前見返し）。他、不明朱印2つあり。第六冊第六巻のみ前遊紙を1丁持つが、これは第六巻第一丁が落丁していることと関係すると思われる。また、第一冊の前見返しおよび第八冊の後見返しに元禄八年乙亥二月求之昌春／日誉（花押）」とある。また、各冊の表表紙に胡粉で「列二」と大書されていることから、経蔵や文庫の中に納められていたと推測される。

『添品妙法蓮華経』とは、『法華経』を随の時代にインドの闍那崛多（じゃなくった）と達摩笈多（だるまぎゅうた）が訳出したもの。先行する鳩摩羅什が訳出した『法華経』に欠けていた薬草喩品などを「添品」つまり増補した『法華経』である。

当該書は天海版大蔵経のひとつ。天海版は天台僧天海が発願し、徳川家光の援助を得て寛永14年(1637)より慶安元(1648)年にかけて刊行された、日本最初の完備した版本大蔵経である。大蔵経とは、すべての仏教経典を合わせたものを言い、一切経とも呼ばれる。天海版も全665函1454部5781帖からなる巨大な叢書である。古活字版と呼ばれる、近世初期に集中して行われた活版印刷物のひとつでもある。

当該書がユニークな点は、天海版は通常、伝統に倣って蛇腹折りの折本装で仕立てられるのが通常であるのに比して、冊子体の袋綴装となっている点である。しかも、製作時から折本装とは別に作ったものと推測される。なぜなら当該書は喉の部分は印刷されておらず、この余白が綴じ代となっていることで無理なく冊子体になっているが、余白を作ることが出来るのは製作者だけだからである。こうした冊子体の天海版は他にも数点見られ、とくに石川武美記念図書館の成篁堂文庫に多く所蔵されている。

II 『勝宗十句義論』

『勝宗十句義論』はヴァイシェーシカ学派（勝宗・勝論）の慧月が編纂した綱要書（概論書）。サンスクリット原典は伝存せず、玄奘による漢訳のみが伝わる。

「句義」（パダールタ）は「語の指し示す対象」を原義とし、同時に「概念」をも意味する語。そして、その句義を、実（実態）、徳（性質）、業（運動）、同（普遍）、異（特殊）、和合（内属）、有能（力能）、無能（無力能）、俱分（普遍と特殊）、無説（否定）という10のカテゴリーに分類し、それぞれの定義、特性、相違点などを記す。

『金七十論』同様『勝宗十句義論』も、江戸時代の後期に単独のテキストと学僧たちによる注釈書が刊行された。宝永5年(1708)刊『勝宗十句義論』の跋文（僧闇曇華記）には「観徹和尚因講唯識論、使予校讎此書行于世、蓋其意謂、如論之排斥邪宗、若不委所破則、能破之義亦難窮矣」（観徹和尚の唯識論を講ずるに因りて、予をして此書を校讎して世に行はしむ、蓋し其意に謂へらく、論の邪宗を排斥するが如き、若し所破に委しからざれば、則ち能破の義また窮め難し）と刊行の目的が記されている。すなわち、外道の説を排除するためには、その外道の説を詳しく知っておく必要がある、という。浅学にして今回の展示にならぶ『勝宗十句義論』の注釈書の内容を十全に理解することはできないが、これらの注釈書が著された目的も同じところにあったと思われる。

参考：宮元啓一『牛は実在するのだ！ インドの実在論哲学『勝宗十句義論』を読む』（青土社1・999年）
興津香織「江戸時代における『金七十論』研究の概要意義」
（宮元啓一・興津香織『インド二元論哲学へのいざない』（花伝社・2026年）所収

4 虎喝撰『科註勝宗十句義論』1巻1冊 宝暦10年（1760）刊

支子色表紙（26.0×18.4cm）。表紙左肩子持ち粹刷題簽「科註勝宗十句義論 〈再治〉完」。内題、「科註勝宗十句義論」。無辺無界。序、20字12行。本文20行。墨付28丁。版心「△科註勝宗十句義論 ○幾（丁数）」。尾題、「科註勝宗十句義論終」。

『勝宗十句義論』の本文を細分化（分科）して構造を明らかにした上で、適宜略註を付したものの。編者、一観虎喝の伝は未詳。

もともとは中野宗左衛門によって刊行されたものだが、鶴見大学本は、刊記「寶暦十年庚申孟夏吉日」の下に入れ木をして、〈東六条中珠數屋町〉池田屋七兵衛／〈同下珠數屋町〉丁子屋九郎右衛門／〈五条橋通高倉東入町〉北村四郎右衛門」とり、巻末に「〈花屋町西洞院西江入〉永田調兵衛」の蔵版目録を付す後印本。明治29年には連存教による本書の増注本も刊行されている。

5 基辨撰『勝宗十句義論釈』2巻2冊 安永8年（1779）刊

支子色表紙（26.1×18.2cm）。表紙左肩子持ち粹刷題簽「〈扶桑／撰述〉勝宗十句義論釋 上（下）」。序は興福寺盛範による。内題、「勝宗十句義論釋卷上（下）」。四周単辺無界（20.7×14.1cm）。序7行、14字。本文10行、20字。墨付、上巻44丁、下巻48丁。版心「勝宗十句義論釋卷上（下） 幾（丁数）」。尾題「勝宗十句義論釋卷上尾」。

上巻末の奥書「安永改元辰年十二月以大同房上人自筆本／書寫功訖、至難解文義頗受指摩校正已／南都興福寺竹林院相宗學道沙門盛範」、下巻末奥書「安永三午歲五月以大同房基辨上人自筆本／書寫、至難解文義頗受指摩校正已／南都興福寺竹林院相宗學道沙門盛範」に拠れば、刊行に際しては、序者盛範が、基辨自筆本を書寫した上で、臆見を加えつつ校訂を加えたという。

刊記（下巻後表紙見返し）「安永八己亥孟秋吉旦／皇都書林／〈寺町通五条上ル町〉中野宗左衛門／〈河原町三條下ル二町目〉藤井吉次郎／〈東六条中數珠屋町〉池田屋七兵衛／〈同下野珠數屋町〉西村九良右衛門／〈五条橋通高倉東江入町〉北村四郎兵衛」。

基辨（1722-1791、一説に1681-1750）は法相宗の学僧。尾張の人。俗姓、井上。号、大同房、三松。1736年、妙適について出家。師の没後、蓮華寺の道空に密教を、薬師寺の基範に法相を学ぶ。京、南都での講演と著作に専念した。唯識（ただ識＝心だけがあるとする思想）と因明（仏教論理学）に通じ、著作も多い。

6 快道撰『勝宗十句義論訣擇』5巻5冊 寛政8年（1796）刊

御召茶色表紙（27.3×18.7cm）。表紙左肩子持ち粹刷り題簽「〈勝宗〉十句義論訣擇 一（～五）」。内題、「勝宗十句義論訣擇卷第一（～五）」。四周双無界（20.6×14.4cm）。10行、20字。墨付、巻第一

36丁、卷第二36丁、卷第三36丁、卷第四34丁、卷第五54丁。版心、大黒口「勝宗十句義論卷第幾 幾（丁数）」。尾題「勝宗十句義論訣擇卷第一（～五）終」。

刊記（巻第五後表紙見返し）「寛政八年〈丙辰〉十月／皇都書舗／北村四郎兵衛／黒石七兵衛／西村九郎右衛門／八尾清兵衛」。

快道（1751-1810・俗姓、須藤・字、林常。）は生国上野国勢多郡の相応寺で快音に師事して出家。大和国豊山長谷寺で性相学を学び、後に高野山に入る。晩年は武蔵国浦和の玉蔵院、江戸根生院の住持となる。江戸随一の碩学。著作は多く、『金七十論』の注釈書『金七十論藻鏡』も写本で伝わる。

7 宝雲講：稻溪・密雲記『十句義論聞記』1巻1冊 天保15年（1844）刊

支子色表紙（26.0×18.0cm）。表紙左肩子持ち粹草色刷題簽「十句義論聞記 全」。内題、「十句義論聞記」。四周単辺無界（20.5×14.7cm）。10行、20字。墨付、57丁。版心、単黒魚尾下向・線魚尾「〔上象鼻〕十句義論聞記 幾（丁数）」。尾題「十句義論聞記上 終」。

巻末に「天保十五〈甲辰〉十月二十有八日終之於勸學寮燈下云爾」とあり。

刊記（後表紙見返し）「筑前志摩郡稻留村 蓮照寺蔵版／京都書林 〈取次 六條東中筋魚店上ル〉菱屋卯助」。

宝雲（1791-1847・号、烏水）は、筑前嘉穂郡の本願寺派長源寺の住職。遊学に出て、華嚴・天台を学び、性相学にも通じた。筑前学派の中心的存在で本願寺勧学となる。宝雲にも、『金七十論私記』『金七十論烏水録』『金七十論聽記』といった注釈書があったことが知られているが、残念ながら現存伝本は見つかっていない。

※解題担当

I 『金七十論』：万波寿子（文学部ドキュメンテーション学科）

II 『勝宗十句義論』：伊倉史人（文学部ドキュメンテーション学科）